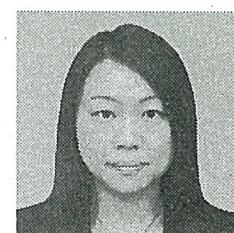


オピニオン「オープンカレッジ」

現代社会学部川村隆子准教授の「子のための特別養子縁組

～実の親子と同じ関係を形成～」掲載

●中部経済新聞 2016年6月1日(水)



名古屋学院大学
現代社会学部准教授
川村 隆子

かわむら たかこ 民法学。
近畿大学大学院法学研究科博士。
後期課程満期退学。修士(法学)。
1970年生まれ。

庭環境に包まれ成長するのが一般的である。
しかし、親が病気など何らかの理由で、子を育てることが困難になる場合がある。

庭環境に包まれ成長するのが一般的である。

（

実の親子と同じ 関係を形成

晚婚化や女性の社会進出

などにより、子を授かりた

いと願いながらも断念せざく姿に驚かされる大人は多い。

ただ、普通の家庭のぬくもりを実感することができないのも現実である。これ

を補う制度の一つに「里親制度」がある。児童相談所

の委託を受けた里親が子を預かり、日常生活や週末、夏休みといった、ごく普通の家庭環境を体験する貴重な時間を提供する。

とはいっても、里親制度は、親子関係を形成するもので

ほとんどの親は、悩みながらも、子の健全な成長と希望ある未来を願つて子の監護・養育に当たっている。一方、子は、原則として20歳までは親の親権に守られている、ということを意識することなく、時には反抗しながらも、安心できる家

棄（ネグレクト）などの虐待により、幼い命が失われるというニュースは後を絶たず、残念ながら、私たちの耳にはさほど珍しい話題ではなくなってしまっている。

昨今、子に対する養育放

棄（ネグレクト）などの虐

待により、幼い命が失われ

るというニュースは後を絶

たず、残念ながら、私たち

の耳にはさほど珍しい話題

ではなくなってしまってい

る。

昨今、子に対する養育放

棄（ネグレクト）などの虐

待により、幼い命が失われ

るというニュースは後を絶

たず、残念ながら、私たち

の耳にはさほど珍しい話題

ではなくなってしまってい

子のための特別養子縁組

る。また、虐待により、親の元を離れるべきだと判断される場合もある。いずれにせよ、自立する能力のない子は誰かに守られる必要がある。

こうした場合、児童相談所が対応に当たることになると、祖父母や親族などが親代わりになることもある。

が、それが困難な場合、乳児院（2歳未満の子）や児童福祉施設（2歳以上18歳未満の子）などが子の成長を助ける。

これらの施設では児童福祉や職員が、懸命に子の監護・養育を行っている。ほとんどの子が18歳になるまで施設で成長することになるが、自分の置かれた境遇

に新設された制度で、原則として6歳未満の子を対象とした養子縁組である。家庭裁判所の審判により縁組が成立すれば、子と実親との親子関係が断絶するという厳格な効果を有している。そのため、養親となる者は、実の親子関係と変わらない「親子関係」を形成する誓いと覚悟が必要になる。それらがなければ、子は自身のすべてを養親に委ねることができないだろう。

はない。さまざまな意見はあるだろうが、子の健全な成長に必要なのは、生涯無償の愛を注いでくれる親であり、温かな安定した家庭であることに偽りはない。そのような関係を形成することが期待される制度として「特別養子縁組」がある。

特別養子縁組は、1988（昭和63）年、「子のための養子縁組」として民法に新設された制度で、原則として6歳未満の子を対象とした養子縁組である。家庭裁判所の審判により縁組が成立すれば、子と実親との親子関係が断絶するといふ。その一方で、愛情を注いでくれる親が現れるのを心待ちしている子は数多く存在している。こうした双方の出会いが、新しい夢を切り開くかもしれない。

もちろん、「子育てがしてみたい」という気持ちだけ避けるべきである。「親のため」の縁組ではなく、「子のため」の特別養子縁組なのだから。